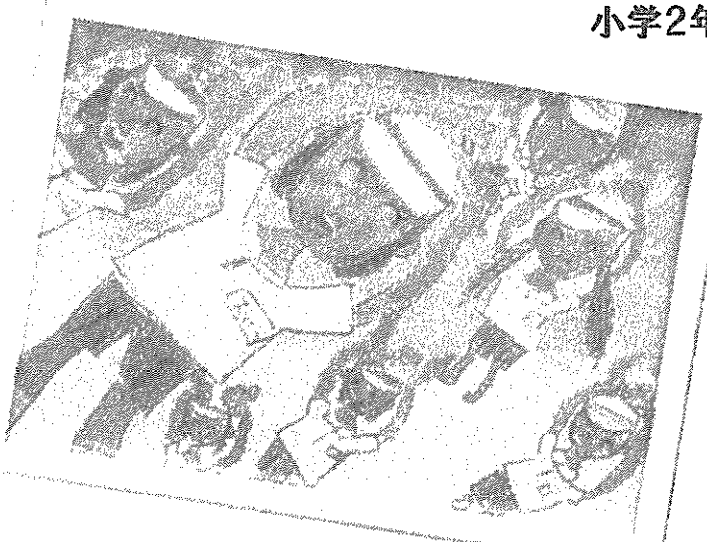
2015年度

人権作品集

あいさつは
笑顔がふえる
第一歩

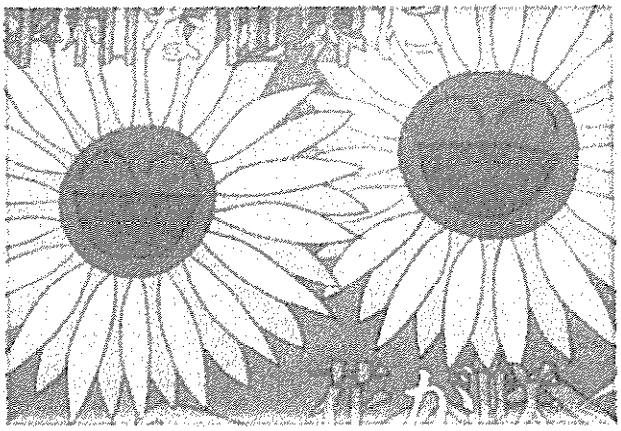
「人権」に関する標語選定作品　小学6年生

「人権」に関する図画選定作品
小学2年生



手を差し伸べる
その優しさが
嬉しさに

「人権」に関する標語選定作品　中学3年生



「人権」に関するポスター選定作品
中学3年生

はじめに

名張市・名張市教育委員会では、日常の家庭生活や学校生活、社会生活などでの体験を通して実感された、人権を守ることの大切さや偏見・差別などの社会の不合理をなくしていくことへの思いを表現した人権作品を市民のみなさまから募集しています。

本年度も、小学校・中学校・高校生・高等専門学校生をはじめ市民のみなさまから、「人権」に関する作文・標語・ポスター（図画）・フォトを合わせて一万二千六百九十二点もの応募をいただきました。今年度も、一般の方から作文・フォトの部に応募いただきました。人権作品の取り組みが、小中高校生から一般の方々に広がっていることをたいへんうれしく思っています。

全体を通して見てみると、あらゆる差別や人権問題の解決のため、家庭や学校・社会生活で自ら体験したことや感じたこと、学習で学んだことを通して、人権尊重の大切さや、差別をなくしていくための意見、感想が述べられている作品、また自分自身を振り返り、自分の問題としてできることをしていこうとする姿勢や意欲が伝わってくる作品が数多く見られました。日ごろの学校、地域等での人権・同和教育の取り組みの成果だと喜んでいます。

この作品集には、応募いただいた作品の中から、小学生・中学生の作文十点、標語十五点、図画・ポスター二十点を掲載しました。

これらの作品の中から、図画・ポスターの二作品、標語の二作品を啓発用ティッシュとして活用させていただいています。また、今年度より、図画・ポスター九作品と標語の七作品を掲載した人権カレンダーとして、制作しました。

この作品集を通して、人権について考えていただくとともに、さまざまな学習の場でご活用いただき、人権意識の高揚と人権・同和問題の一日も早い解決に向けて、一層ご尽力いただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、本年度、作品をご応募くださいましたみなさまに厚くお礼申し上げますとともに、来年度、より多くのみなさまにご応募いただきますよう心からお願いを申し上げます。

目次

作文

《小学生の部》

○ともだち（1年生）……4
○言いたいことはしっかり言おう（2年生）……5
○たくさん助けてくれたお友だち（3年生）……6
○言葉で伝えよう（4年生）……7
○思いこまずに言ってみよう（5年生）……8
○Tさんの笑顔（5年生）……9
○差別をなくそうと行動する人（6年生）……10
○仲間を増やすこと（6年生）……11

《中学生の部》
○個性を認めあおう（1年生）……12
○人間の権利と差別（1年生）……14

標　語
《小学生の部》……16
《中学生の部》……17

図画・ポスター
《小学生の部》……18
《中学生の部》……21

ともだち

（小学1年生）

わたしとAちゃんは、ようちえんのときからのおともだちです。クラスには、おなじようちえんのおともだちがいっぱいいたのでどきどきしたけど、すぐにがっこうになれました。あたらしいおともだちもふえて、うれしいきもちでした。がっこうもたのしいです。うんどうかいのれんしゅうのとき、つなひきのとっくんをおともだちとしていました。Aちゃんが、

「しろぐみはれんしゅうしないでいいよ。」

といいました。Aちゃんはあかぐみなので、わたしたちしろぐみがれんしゅうしてかつのが、いやだからいったとわかりました。とてもいやなきもちでもやもやしていました。でもなにもいえませんでした。そのあとおなじしろぐみのともだちとそうだんしてれんしゅうをしました。わたしはかちたかったからです。まわりのともだちもおなじきもちでした。

2がっきになってかかりをきめるとき、わたしは、ほけんがかりにてをあげました。

「やりたいひとがいっぱいだからじゃんけんできめようね。」

と、せんせいがいいました。Aちゃんがあとだしをしてわたしはまけました。かえっていえで大なきをしました。こころのなかでずるいとおこっていました。でもどういっていいかわかりませんでした。やすみじかん、ともだちにはなしをしました。すこしすっきりしました。

このさくぶんをかいているとき、せんせいにこのことをいおうとおもってはなしました。Aちゃんにいいかえせなかったこと、もっとAちゃんにききたかったことをはなしました。せんせいと3にんではなしをしました。Aちゃんはすこしびっくりしたかおをして、なきながら、

「ぜんぜんしらんかった。ごめんね。」

といって、

「いやなきもちにさせてごめん。これからもなかよくしてほしいねん。」

といってくれました。わたしはそのとき、もっとはやくじぶんのきもちをAちゃんにいえていたらよかったのにとおもいました。わたしもまえにあとだしをしたことがありました。そのときはかってもうれしくありませんでした。Aちゃんをせめてしまったけど、じぶんのことをかんがえたらちょっとおこっていたのがはずかしくなりました。Aちゃんとはなしあいをしてきもちがつながったようにおもいました。これからもずっとなかよくしたいとおもいます。

わたしがけがをしたときやこまったとき、たくさんのともだちがこえをかけてくれます。これからもこまったことやいやなことがあったらともだちやせんせいにそうだんします。クラスのめあてのやさしさいっぱいのクラスになるようまいにちをともだちといっしょにたのしくなかよくすごしたいとおもいます。

言いたいことはしっかり言おう

（小学２年生）

わたしは、一年生のときからＡちゃんに、いじわるをされていました。

学校でＡちゃんとなかよくできている時もあるのですが、Ａちゃんがわたしをなかまに入れてくれない時は、ないしょ話をしたり、話を聞いてくれなかったりして、いやな思いをすることがよくありました。

この夏休み、学どうでも同じようなことがあって、わたしがいやな思いをしていることに先生が気づいてくれました。そして、かんけいしていた人たちと話し合うきかいをくれました。

でも、わたしはみんなで話し合う時に、「本当のことを言うのがこわい。また、同じめにあいたくない。」という思いで、なきそうで声が出ませんでした。だから、先生に二人で話したいとおねがいしました。

二人で話し合うことになっても、わたしはかたまってしまい、なかなか話すことができませんでした。先生とべつのへやで自分の思いを書きました。そこには、今までされていやだったことをすべて書きました。さいごに、「Ａが大きらい。今、わたしは学どうをやめたい。」とも書きました。

これを元に話し合いの中で、自分の気もちをＡちゃんに伝えることができ、もやもやしていた気もちがすっきりしました。わたしの気もちを分かってくれたＡちゃんは、その時

「ごめん。」

と、あやまってくれました。それから、Ａちゃんとはなかよくしています。

わたしは、お母さんに学校であったことや、学どうであったことをぜんぶ話します。このこともお母さんに話しました。すると、つぎにこんなことがあった時のために、お守りを買ってくれました。これを見ていると、お母さんがついていてくれるような気がして、ゆう気が出ます。それで、その後いやなことがあった時も、自分の気もちをつたえることができました。

このできごとは、わたしにとってとてもいやなことでしたが、自分の言いたいことをしっかり言うことのだいじさを学びました。そして、みんなとなかよくしたいなと思いました。

また、自分でもきめたことがあります。それは、自分がされていやなことは、あい手にはしない、こそこそ話やわるいことにつられて、自分もしないということです。

わたしと同じような思いをする子がでてこないように、みんなとささえ合って、学校生活をおくりたいとおもいます。

たくさん助けてくれたお友だち

（小学３年生）

わたしは、道とくのべん強で『わたしのせいじゃない』というべん強をしました。わたしが心にのこったのは、『友だちがないているのを見ても、わたしは見ているだけだった。』という言葉です。わたしは、これまでお友だちがけんかをしているのを見ても、とめられませんでした。なぜかというと、助けに行ったらこんどは、わたしも、いじめられると思ったからです。でも本当はこわくても、いじめられたり困ったりしているお友だちを助けたいです。だから、わたしも見ているだけじゃなくて、助けたいと思います。

わたしは夏休みに手じゅつをしました。なぜかというとわたしは、右と左の足の長さが４cmちがっていたからです。だからいつもは、歩きやすくするためのくつをはいていました。でも歩きやすくはなったけど、ときどきこけてしまうので困っていました。お友だちと遊ぶのも走るのが苦手だからブランコや鉄ぼうしかしませんでした。

わたしは、お友だちといっしょにおもいっきり走りたいとずっと思っていました。すると２年生の終わりぐらいにママが、

「３年生の夏休みに手じゅつするよ。」

と言いました。その時わたしは、こわいと思いました。でも自分の足のためにがんばろうと思いました。

そして手じゅつが終わって二学きが始まりました。手じゅつはせいこうしたけど朝はいつもママに送ってもらって、お姉ちゃんには荷物をはこんでもらっています。前までは、歩くのはまつばづえを使っていました。

わたしがたいへんだったのは、左足がつかないようにけんけんしたり、長いかいだんや遠いトイレに行ったりすることです。いつもかんたんに持っていたふでばこやノートをはこぶのもできませんでした。さいしょは、それがいやでした。でも、うれしいことがいっぱいになってきました。

お友だちがたくさん助けてくれました。Ａさんは、図書室にいっしょに行ってくれました。わたしが読みたい本をいっしょにえらんでくれました。また、Ｂさんは、いっしょにトイレに行って、とおれるように、スリッパをどけてくれました。Ｃさんもわたしのスピードに合わせて、ゆっくり歩いてくれました。Ｄさんは、ランドセルをとりに行ってくれたり、きゅう食もとりに行ってくれたりしました。ほかにもたくさんのお友だちに助けてもらいました。

わたしは、困っている人を助けたいと思っているけど、みんなも困っているわたしを助けてくれました。自分から声をかけてくれるお友だちがいっぱいです。だからわたしの心とお友だちの心は同じです。だからお友だちといっしょなら困っている子やいじめられている子を助けられると思いました。

わたしは、こんなお友だちがいてうれしいです。

言葉で伝えよう

（小学４年生）

私は三年生の時、「死ね、自殺しろ。」と書かれたことを今でも覚えています。その時はすごく心が痛かったし、つらかったです。学校に行くのもいやでだれにも会いたくなかったので、ずっと自分の部屋でこもっていたら、先生から電話があって、

「いっしょにがんばろう。」

と言われて、ちょっとうれしかったです。車で送ってもらったけど、学校がこわくて、なかなかママからはなれることができませんでした。先生がすごくやさしく、

「いっしょに書いた人をさがそう。」

と言ってくれたので、はなれることができました。

ずっと教室で話し合って、早く出てきてと思いながら、一週間がすぎても出てきませんでした。もういやだ、いやだ、学校なんか行きたくない。また、書かれたらどうしようと考えたら、すごくつらくなりました。

そんな時、家族が、

「先生もがんばって書いた人を探してくれているんでしょ。」

「みんなあなたの味方だよ。」

と言ってくれたので、少し元気がわいてきて学校に行くことができました。そして、友だちが、

「いっしょにがんばろう。」

と言ってくれて、みんなが私のことを考えてくれていると思ったら、うれしかったです。先生は毎日時間を取って聞いてくれていたし、私が泣いていると、

「私たちがついているから。」

と友だちが言ってくれました。心はつらかったけど、ささえてくれている人がいると思うと、ちょっとうれしくなってきました。

三週間目になったときは、私はもうぜったい出てこないと思いました。となりのクラスでも探してくれたけど、出てきませんでした。何で出てきてくれないの、こわいと心の中でくり返していました。

四週間目というところで、書いた人が自分から出てきました。その時は、もう終わったんだと思ってすごくうれしかったです。でもいつもあんなに元気に遊んでいて、ずっとかくしているなんてとも思いました。死ねとか自殺しろとか書かないで、言葉で言ってほしいし、もうやってほしくないと思いました。書いた人や理由がわかって、その日の夜は、ぐっすりねむれました。もうこんなことは二度とあってほしくないです。書かれた人の気持ちをわかってほしいです。

その後、比奈知文化センターに行きました。人けんカルタの話を聞いて、なかまに入れてもらえなかったら、その子は悲しい気持ちになるだろうなと思いました。そして、その時話を聞いた田中先生が、四年になって、学校に来ました。その中で担任した子の話が、心に残りました。同じように、最初はなかがよかったけど、なか直りできなかった時のことを思い出しました。わたしは、友だちにいやなことを言われると、きつく返してしまうことがあります。友だちがやっていたら、いっしょにやってしまって、だめだなぁと思うことがあります。でも、人の悪口を落書きすることは絶対にしてはいけないことだと思います。言葉でいやな気持ちになるし、うれしい気持ちにもなります。どんなことがあっても言葉で言って、かい決するようにしようと思います。

思いこまずに言ってみよう

（小学５年生）

わたしたちは、九月にそに高原に野外活動に行きました。そこでは、キャンプファイヤーや野外すい飯をしました。わたしは行く前から、とても楽しみにしていました。

でも、一つ心配なことがありました。そにでは、食べることもそうじも家とはちがい、全部自分でしなければなりません。協力しないとできないことばかりです。それなのに、活動はんのメンバーは、今まであまり話したことのない子たちばかりだったからです。

今回活動するのに、わたしたちは、一番大きな目標として、クラスの友達の新しい面やよい所を発見しようと話し合いました。

それは、野外すい飯のときでした。役割は分たんしてあったのですが、ほう丁の数が少なくて、わたしはしばらく見ているだけでした。かわってほしかったけれど、かわってくれないんじゃないかと思いこんでいました。でも、どうしてもわたしも切りたかったので、

「わたしにも切らせて。」

と思いきって言いました。すると、その子が

「いいよ。はい。」

とほう丁をわたしてくれました。わたしは、やさしい所があるんだなと思って、わたしがその子に持っていた思いこみやイメージがかわりました。

すごく小さなことのように思うと思いますが、自分が心を開いて話しかけていけば、友達との関係はかわるんだと思いました。

同じようなことが、別のときにもありました。わたしは、同じはんの、特別支援学級の友達と、いっしょに行動していました。正直に言うと、わたし以外は協力してくれないんじゃないかと思っていました。でもそれもわたしの思いこみでした。歩きにくいときには、手を貸してくれたり、キャンプファイヤーの出し物でこまっていたときに、やさしい言葉をかけてくれたりしたのです。

わたしは今まで決まった子としか遊んでいませんでした。それで特に困ったことはなかったのですが、このことをきっかけに、これからは、友達を思いこみのイメージで決めつけず、話していこうと思いました。

それとともに、わたしもクラスのあまり話したことのない子から、一つのイメージで見られているんじゃないかとも思いました。

これからは、自分からゆう気を出して話していこうと思うし、もっとたくさん友達をつくることは大切だと思うので、いいと思うことはどんどん行動していこうと思っています。

Tさんの笑顔

（小学５年生）

私のクラスにいるTさんは、足が不自由で、すこしゆっくり生活している。先生が側にいつもいて、給食や音楽以外は、おおぞら学級ですごすことが多い。

私とTさんの出会いは、保育所だ。先生に新しい友達と紹介されたとき、全く興味を示さなかった。入園しても、あまり園に来ていなくて、Tさんがいることを忘れてしまうほどだった。

２年生になったある日、おおぞら学級に行くTさんを見たら、笑顔がなく、何かさみしそうに見えた。下を向いて暗く感じた。気になった。私の中にある気持ちが生まれた。「Tさんがさみしいなら、自分がいっしょにいてあげよう。」ずっとTさんのことを見ていないときはわからなかったけど、Tさんの気持ちが伝わってきた。そして昼休みに、人見知りだった私から、勇気を出して、声をかけた。

「Tさん、何かして遊ぼう。」

担当の先生が、おどろいた顔をした。あまりのおどろきに、こっちが混乱してしまった。きっと、そういう風にTさんに声をかけることがなかったのかなと思う。

Tさんは、時々きつめにしゃべる時はあるけど、いつも優しい。私が、すこしおもしろいことをすると、よく笑った。かくれんぼみたいに少しかくれて顔を出すと「あー」といってよく笑った。

その時間はとても楽しかった。でも、私も、きついことを言ってしまったときもある。そんなとき、レモングラスの人の話をきいた。話をきいて、自分の口の使い方を直そう。もっと優しくしたいと思った。

しかし、クラスがはなれ、気がつくと、私はTさんと遊ばなくなり、またTさんの笑顔がなくなっていった。

そして、５年生になって、また同じクラスになった。なんだか嬉しかった。Tさんは、できることが増えていた。チャレンジしてみようという気持ちが生まれていた。いつも、上の方しか見にくいけど、下の方も見ようとしているのがわかった。階段も上手に上り下りできるようになっていた。もちろん、足が不安定だから、フラフラはする。私は教室で、男子が、走っていると「あぶないな」と思ったりする。でも、担当の先生が５年のはじめにTさんのことをくわしく説明してくれたときから、みんなが、Tさんのことで、気をつけてくれるようになった。みんなから、たくさん話しかけてくれることもあり、Tさんは、とてもうれしそうだ。Tさんの教室を移動するときの、「いってきます。」の声は、うきうきしている。みんなは、まだ声は小さくても、きちんと「いってらっしゃい。」とかえしている。自分もまだまだだけど、もっと自分ができることをふやしていきたいし、もっとみんなが、しょうがいがあるとかないとか関係なく、人とかかわっていきたいと思う。

私は、Tさんの生活が楽しくなったからか友だちができたからかわからないけど笑顔が増えたことがとてもうれしい。最初は、困っているから、一緒にいよう、してあげようと思っていたけど、一緒にいると、一緒に楽しもうという気持ちに変わっていった。私は、一生けん命、毎日努力しているTさんといることが、楽しい。自分の中に、だれかのことを大切にして生活する気持ちが芽生えたこともTさんのおかげだと思う。Tさんだけでなくどの子も笑顔で楽しく勉強、生活ができるように、私もがんばっていきたい。

差別をなくそうと行動する人

（小学６年生）

学年集会の時、となりの組の先生がいじめについて話し合ったことを教えてくれました。その話を聞いていて、私はＡさんにおこったことは私と同じだと思いました。

３年生の時、上の学年の人が私のことをいやなあだ名で呼んできました。最初は軽かったけど、だんだんかげで私を指差して笑うようになってきました。横を通る時もにらまれている気がしました。私はそのことがつらくなってきました。

ある日、その中のＢさんが私の前に、かさを勢いよくバンッと差し出してきました。その人はふざけながらニコニコ笑っていました。でも、私が前を通り過ぎたら、にらんでいるような目でした。なんだか私は遊び道具にされているような感じがしていやでした。悲しかったので家で泣いてしまいました。本当はその時、「やめてよ」とか言い返したかったけど、言ったら何か言われると思い、こわくて言えませんでした。

つらくてがまんできなくなり、お母さんや先生に相談しました。お母さんも先生もすごく心配してくれました。自分一人じゃないと思えて安心できました。この後、その人が謝ってくれて、ようやくこの事は終わりました。

こんな事があったのに、私は差別をする方にもなりました。

Ｃさんにある手紙を渡しました。その手紙にはＣさんのきらいな所をたくさん書きました。いやな事をいっぱい書いているのに、その時は面白いと思う気持ちでいっぱいでした。その手紙を受け取った方の気持ちは何もわかっていませんでした。

Ｃさんのお母さんは私のお母さんに言いました。

その日の夜、お母さんは私に

「何でそんなことしたん」

と怒った感じで強い勢いで言いました。その時、やらなかったらよかったと反省しました。今ふり返って考えると、お母さんは自分の子がこんなひどいことをすると思ってなかったと思います。きっとお母さんは情けない気持ちでいっぱいだったと思います。お母さんを悲しませ、心配させ、今でも後悔しています。

学年集会で「差別をされる人」「する人」「知らん顔する人」「なくそうと行動する人」の四つに分かれることを学びました。私は今まで「差別される人」に入ったことがあるのは分かっていましたが、「差別する人」の仲間に入っている意識はありませんでした。でも、よく考えてみたら、私も差別していました。そして、「差別をなくそうと行動する人」には入っていませんでした。

私は差別する人にもなったし、された人にもなったので、両方の気持ちが考えられると思います。だから、少しでも差別をなくそうと行動する人に近づけると思います。

今、私に出きることを考えました。いじ悪なことをしているのを見たら、

「何してんの。相手の人、今、どんな気持ちか考えてみたら。」

「自分がされていやなことはやめとき。そんなことやって、後で自分が後悔するで。」

と言って、止めていきたいです。そして、少しでも差別をなくす事をしていきたいです。

仲間を増やすこと

（小学６年生）

「毎日を楽しく過ごしたい。」

これは、誰もが願う当たり前のことです。私は、この当たり前の願いをかなえるためには、差別やいじめをしてはいけないということはわかってました。

五年の時に、部落差別のおかしさについて学びました。その地域に住んでいるだけで、「毎日を楽しく過ごしたい」という願いを無視されるのです。差別する人がいるせいで、その人の毎日を楽しく生きる権利を簡単にうばうのです。そんなおかしいことがなぜ今も残っているのか、私はわかりませんでした。この時、私たちは学年全員で「こんなおかしい差別を残す側ではなく、なくす仲間になろう。」と話し合いました。

でも、私のクラスにもおかしいことがありました。その友だちは、低学年のころからずっと「あれ、何か変だな。いやな気持ちがするな。」と思うことがあったそうです。ずっとそれは続いていて、六年になった時にも、クラスの中ですごくいやな気持ちになることがあり、ついにみんなの前で今までの思いを話してくれました。

その友だちの話を聞きながら、クラスの一人ひとりが自分のしてきたこと、感じていたことを振り返りました。そして、それをみんなの前で話すクラスの集いをしました。私はその友だちがいやな思いをしていた時、自分がどの立場にいたかを考えました。直接、相手にいやなことをしていなくても、知っていて黙っていたり、悪口を聞いても否定しなかったりする立場でした。でもそれは、いやな思いをしている人にとっては、いじめや差別をしている人と同じだということがわかりました。

「毎日を楽しく過ごす権利をうばう、差別する人」に私自身がなっていたのです。クラスの集いをして、「差別をなくす仲間」に自分がなろうとせず、「差別を残す側」になっていたことがわかりました。

集いをした後、私は何かを発言したり、行動を起こしたりする前にまず、「このことで誰かがいやな思いをしないか。」と考えるようになりました。その発言や行動の中には、前までの私がいた「うわさを流す人」や「悪口に乗る人」ということも入ります。今までは、そのうわさや悪口に乗らないと、自分が言われる立場になってしまうかもしれないと思って、こわかったです。

でも、みんなで考え合えた今なら、うわさや悪口に流されない「差別をなくす仲間になる」ということができると思います。

そして、その仲間を増やしていきたい、もうこんないやな思いをする友だちはなくしていきたい。これが今の私の思いです。

個性を認めあおう

（中学1年生）

人にはそれぞれ〝個性〟があります。けれども周囲からの差別、批判によって、その一人一人の個性を活かせなくなっているように思います。ではなぜ人と違うと、差別されるのでしょうか。僕は大多数の意見が集まるとそれが普通とか常識と認識されてしまい、そしてその普通から外れた人を気に入らないと感じたり、バカにしたりしてしまっているからだと思います。

そして、僕もそんな中の一人でした。僕の家の近くには、障がいのある人のための特別養護施設があります。そのため、毎日たくさんの、障がいのある人たちが家の前を通り、その施設へ通っていました。その中に、僕たちの家族が「電車のおじちゃん」「あげますのおばちゃん」と呼んでいる二人がいました。

「電車のおじちゃん」は毎日元気で、車掌のふりをして大声で何か言っていました。「あげますのおばちゃん」は毎日僕の家の花を一輪取っては、嬉しそうに玄関を開け「あげますー。」と言うのです。僕は毎日『また来た。早く帰ってほしい。』と思っていました。それは、何を言っているのか分からないのに、ずっとしゃべってくるのが、嫌だったからです。

しかし、二人は毎日、楽しそうに僕の家に来ます。僕の家族は、毎日挨拶を交わし、仲良さそうに話します。そのうちに、二人の妹たちまでその二人になつくようになりました。僕は、そんな姿を、友人や近所の人に見られるのが嫌で、思わず母にこう言いました。

「なんで、あの人たちと仲良くするの。人に見られたら恥ずかしいやん。」

すると母が

「恥ずかしいと思うほうがおかしいよ。あの二人の事、もっとよく見てみたら？」と言ったのです。

「もっとよく見るって、どういうことだろう」と思いながらも、二人との交流は続きました。不思議なことに、最初は何を言っているのか分からなかった言葉も、少しずつ意味が分かるようになってきました。そして僕は二人の優しさや思いやりに少しずつ気付いていったのです。

「あげますのおばちゃん」は、お花がない季節には、自分の家から大切にしている宝物を持ってきて見せてくれるようになりました。お母さんの写真、大事に残しておいたシールにぬいぐるみ。そして、そんな宝物を私達に分けてくれようとするのです。

「電車のおじちゃん」は、通っている施設の園まつり、クリスマス会のチラシを持って一緒に行こうと誘いに来てくれました。僕たちが遊びに行くと、すごく嬉しそうに妹たちの手を引いて案内してくれました。小学校に通っていた時は、マラソン大会や、運動会の応援にも来てくれました。

二人は、私たち家族に、自分にできる精一杯の思いやりをかけてくれているように思いました。そして僕はそんな二人にありがたいなという気持ちがわいてきたし家族のような友達のような親しみも感じるようになりました。いつしか、最初に感じた「一緒にいると恥ずかしい。」という思いは消えていました。

以前の僕は、人の事を見た目や、思いこみで決めつけてしまっていました。その事で、人を知らないうちに差別していたのだと気付きました。以前のあの思い込んでいた事は、とてもひどかったなと思いました。僕は「電車のおじちゃん」

「あげますのおばちゃん」二人にとってもとっても大切な人権の特別授業を受けた気がしました。

自分自身の人の見方が変われば、同じ人でも素敵な魅力がたくさん見つかります。よく見るとは、人を一方向からでなく、さまざまな角度から見つめる事ではないのかと思います。人間は一人一人みんな違います。そしてその違いこそが〝個性〟です。「違い」に気付き「違い」を楽しみ「違い」を互いに認めあう事が、〝個性〟を尊重する事になると思います。僕は自分の〝個性〟も人の〝個性〟も大切にできる人になりたいです。

人間の権利と差別

（中学1年生）

私は、性別や生まれた場所、国籍などで、簡単に差別して『人間の権利』つまり、人権を侵してはいけないと思います。

ある時の、総合的な学習の授業でのことです。先生は、「昔は、職業の差別があったんだぞ。牛の命をいただいて、お肉にして、それを売る仕事をしていた、精肉店の人や、牛などの革を使って何かを作る革具店などが差別をされていた。その当時“死”は不思議なもので、なにかの死にたずさわる人は、近づいてはいけない、近づいたら自分も死んでしまうという迷信があったんだよ。」と、いうことを教えてくれました。私はその話を聞いて、「おかしな話だな」と思いました。「差別をしている人たちは、お肉を「おいしいおいしい」といいながら食べるのに、それをさばいてくれる人には、近づいてはいけないと差別する。それなら差別する人はお肉を食べる資格はないなぁ。だって、その人たちがいなくなったらお肉は食べれないし、自分も結局お肉を食べて、動物の命を、いただいているのだから。」と思いました。そして私は、現代にもそんなおかしな差別は、まだまだ、残っていることを知りました。

違う日の授業です。今度は生まれた場所によっての差別があることを知りました。先生は、「生まれる場所によっての差別があります。例えば、『あの子はA地区の子よ、近づかないようにしないと。』とか、就職や結婚の時に、『あぁ、あなたは、A地区の人ですね。じゃあ無理です。』などと、おかしな理由でことわられたりします。そして、このような差別は、今も続いています。」と教えてくれました。私はこの話を聞いて、この前の話と同じように、おかしな話だなと思いました。なぜ、その地区は、ほかの地区との差があるのだろう。それに、差別を受けている人は、好きでその地区に、生まれたわけじゃない。人は生まれる前に、自分で、生まれる所を決められるわけじゃない。だから、生まれた場所で差別されてしまうのは、おかしな話だと、本当にそう思います。

では、なぜ、こんなおかしな差別は、今、この時も起きているのでしょうか？

私は二つの理由があると思います。

一つ目は、思いこみです。差別する側は、幼いころから、「あの地区に住んでいる人に仲良くしたり、近づいてはだめですよ。」とか、「あの人は○○○っていう、仕事をしている人だから近づいては、いけませんよ。」と、教えられて、かたよった考え方を「それが当然だ。」と思いこんでしまって、おかしな話でも、まちがった方を、信じてしまうのではないかと、私はそう思います。

二つ目は、見て見ぬふりです。これは、差別をする側が「これは、本当は、おかしなことなんじゃないのか……？」と気づいても、もし他の人に、自分がA地区の人たちとしゃべっている所を見られたりしたら、逆に、自分がいままで仲良くしてきた人たちに、さけられたりするのではないかと思ってしまい、自分自身の心に見て見ぬふりをして、ごまかし、自分の心にうそをついてしまっているのではないかなと私は思います。

かたよった考えかただけでなく、ちがう所からの見方も考え、本当に自分が正しいのか、中立の立場で考えて、『あたりまえ』にとらわれず、自分の心に真正面から向き合い、見て見ぬふりをしてうそをつかずごまかさずにいたいです。一度、今までの考え方を、見つめ直して、今までの行動は、良かっ

たのか、それとも、悪かったのかを判断し、自分の信ずる道に進むと、差別はなくなると、私はそう思っています。

みんな同じ『人間』として生まれて、みんなお母さんのおなかの中から、『人間の権利』というものを、みんな同じ分だけ、もってでてくるのです。そしてそれは、決して、だれかに、うばわれたりしていいものではないのです。性別や生まれた場所が違っていても、なんの差もない平等な〝人権〟。人権は他人に侵害されるためにあるんじゃない。人を守るために人権は存在するんです。

私にもある人権。これから私は、この人権といっしょに、ゆっくり、私の人生を歩んでいけたらいいな、と思います。

標語

【小学生の部】

・一人でも　いじめをなくす　行動を　（5年生）
・悪口は　聞かない　言わない　言わせない　（5年生）
・みとめよう　それぞれの色　自分色　（5年生）
・ぼくときみ　なみだも笑顔も　半分こ　（5年生）
・ひろげよう　やさしい言葉　思いやり　（5年生）
・人権の　学びいかして　差別なし　（5年生）
・助けての　小さな声に　きづこうよ　（5年生）
・勇気を出して言ってみよう　感謝の気持ちやごめんなさい　（6年生）
・広げよう　思いやりの輪　声かけで　（6年生）
・心のとびら　あけて築こう　友との信頼　（6年生）

【中学生の部】

・悪口は　いじめにつながる導火線　（1年生）

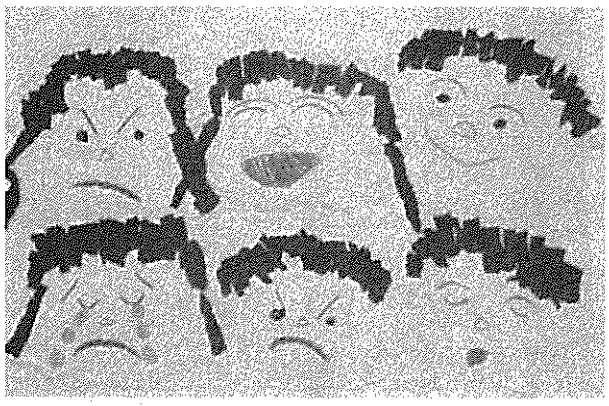
・悪口は　人も自分も　傷つける　（1年生）

・ふみだそう　言える勇気と　止める勇気　（2年生）

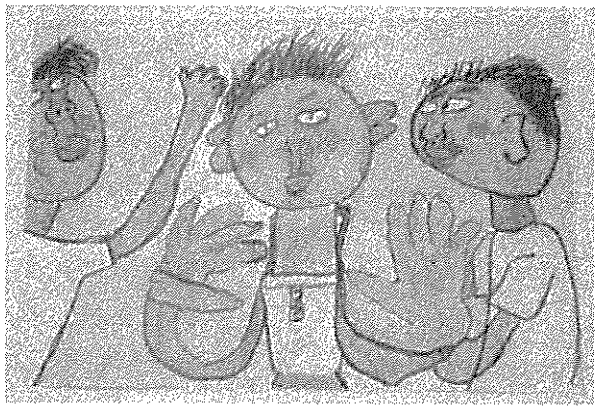
・見なおそう　自分の態度　相手の気持ち　（3年生）

・手を差し伸べる　その優しさが　嬉しさに　（3年生）

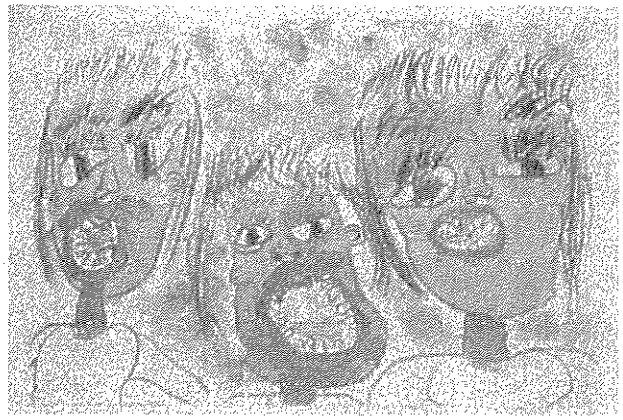
≪小学生の部≫



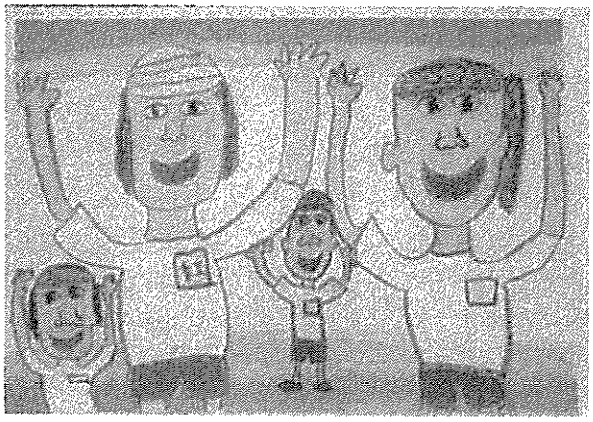
1年生



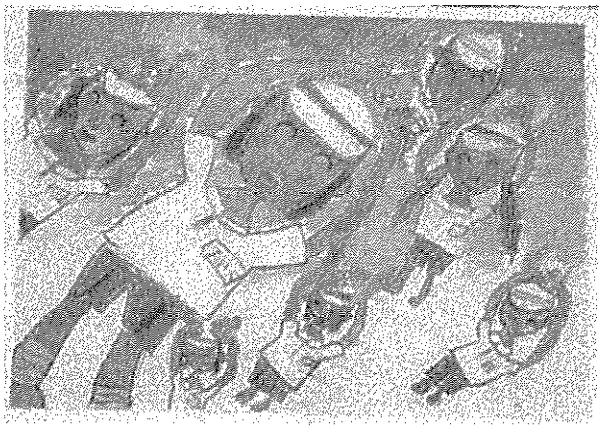
1年生



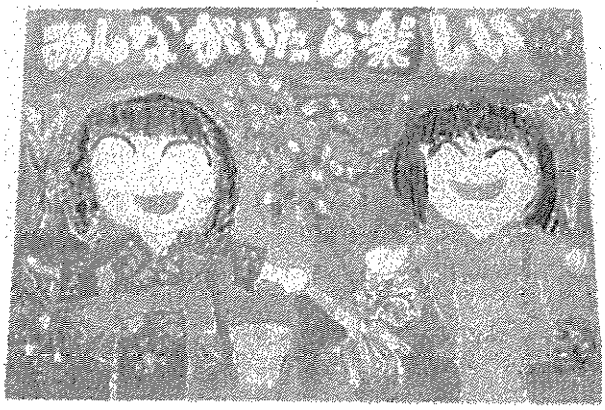
1年生



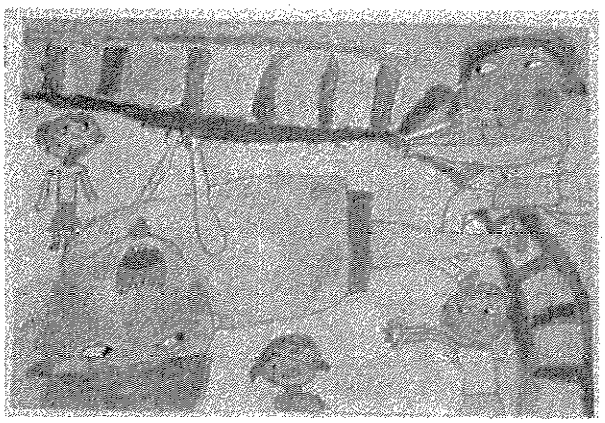
2年生



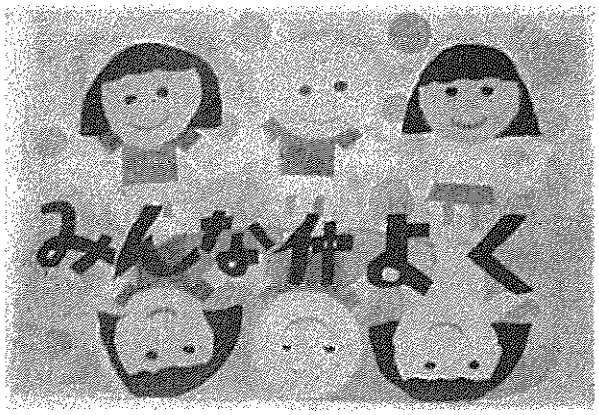
2年生



3年生

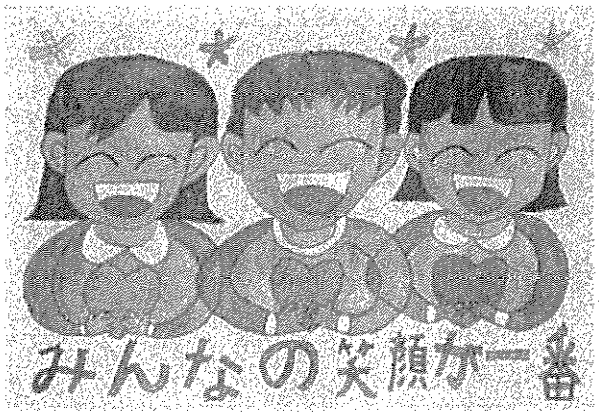


3年生

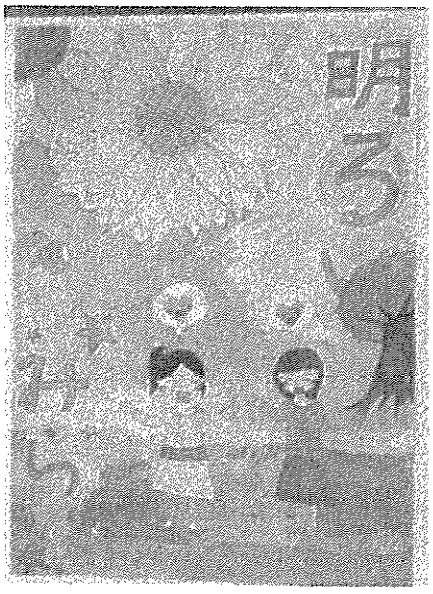


4年生

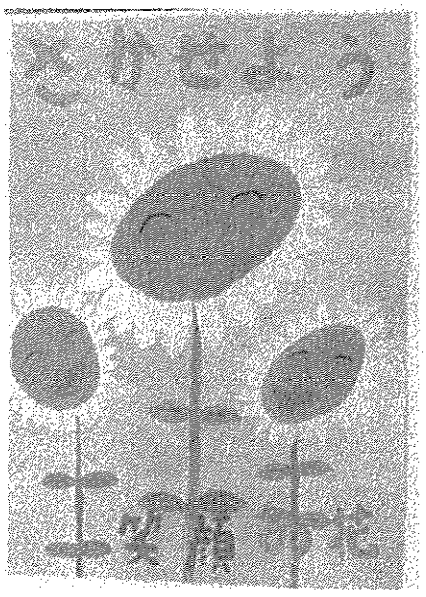
4年生



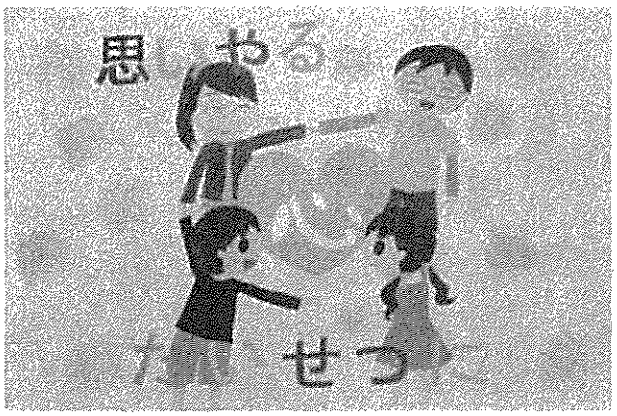
4年生



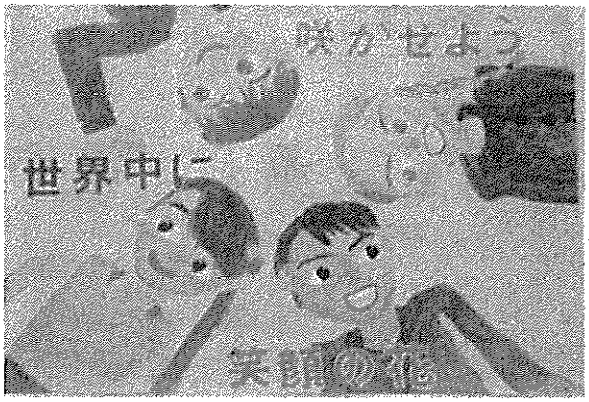
5年生



5年生



5年生



5年生

6年生

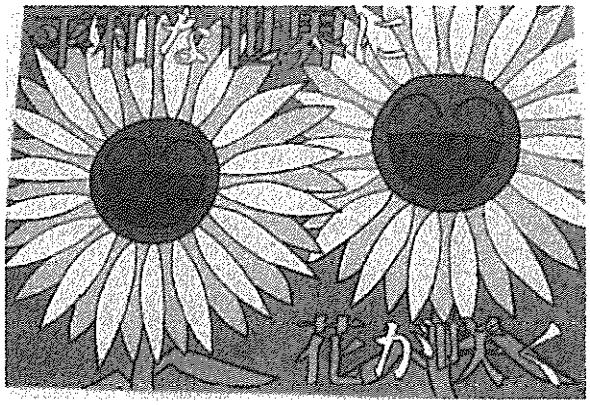
≪中学生の部≫

２年生

２年生

３年生

３年生



３年生

—人権作品集—

２０１６年１月発行

名　　張　　市

名張市教育委員会

この冊子は再生紙を使用しています。